記事

消息

アンブロアズ・パレ四〇〇年祭を巡って

大村　敏郎

一五九〇年十二月二十日、アンブロアズ・パレ(Ambroise Paré)はパリの自宅で平和に生涯を終えた。生れた年が明らかでないので享年何歳と書けないが、八十歳位であったと思われる。今年一九九〇年はパレの没後四〇〇年という節目の年に当るので、パレの生涯と業績を振返り、彼が残した様々な影響を辿ってみようと考え、昨年から日本医史学会・日本外科学会・日仏医学会などの有志が中心になって「アンブロアズ・パレ四〇〇年祭記念会」の準備を進めてきた。

異なる分野から集った実行委員会は実務に入る前に、パレを巡る勉強会を重ねて、共通の認識を得、この記念会の意義を確かめあった。こうして親密な雰囲気を作りパレに対する熱情あふれる活動が始まった。

パレは近代外科の父と呼ばれ、西洋医学史の中に確固たる地位を占めているが、わが国に及ぼした影響については一部の研究者に知られているにとどまっているのは残念なことである。

記念会の計画では、四〇〇年目の命日に当る一九九〇年十二月二十日に、東京お茶の水の日仏会館で記念式典と記念講演会を夕方六時から開催する。講演会はこの他パレ全集の訳本が作られた京都と長崎において来年行われる予定である。記念展示に関しては、一九九一年四月三日から七日にかけて日本医学会総会医史学展示会の中に一室アンブロアズ・パレの部屋をいただき、一般の人々にも解りやすい外科絵図や、フランスの資料、ビデオの設置が予定されている。

記念出版物は明年の医学会総会をめざして、記念式典の記録、パレに関する研究の紹介、パレ全集に含まれている『弁明と旅行記』の翻訳など意義ある内容を盛りこむ予定である。もう一つ、パレに関する一般向けの書物のない現状なので、記念式典に間に合うように文庫本の用意が進められており、記念式典の出席者に差上げる計画もある。

さらにNHKの協力によるテレビ番組製作も進行しており、国内の資料のみでなく、フランスにおけるパレの生地ラヴァルや活躍の場であったパリの取材に取組んでおり、記念式典当日に教育放送で放映して、一般の人々の注意を喚起するはずである。

パレ四〇〇年祭記念会は明年六月の京都における日本医史学会総会までの約半年間、以上のような活動を計画しているが、その他に医学界新聞はすでに今年の年頭にパレ特集の鼎談を取上げたり、雑誌『臨床外科』は今年の後半の表紙にパレに関連する写真を連載して、四〇〇年祭の気運を盛り上げている。学会では日本外科学会はもちろんのこと、日本脳神経外科学会、日本消化器外

科学会でもパレに原点を求めてテーマを取上げている。

さらにもう一つの話題は、フランスのパレの生地ラヴァルの歴史と考古学の学会がパレの四〇〇年を記念して、「パレとその時代」というコロキウムを企画しており、日本へ及ぼした影響について講演するようにという依頼が舞いこんできたことである。昨年の十二月二十日付の手紙で、「今から三九九年前にパレはパリで死にました」という心憎い書き出しであった。十八年前に、この町の市役所前広場のパレのブロンズ像が没後二五〇年記念に建てられたことを知ったのが、今回の四〇〇年記念行事を企画する出発点であったから、喜んでこのコロキウムに参加することにした。ラヴァルの新聞には、日本からパレのことをラヴァルの住人よりもよく知っている医史学者がやってくると、日本語の活字入りの記事がのった。

パレを通して日仏両国に新しい掛け橋が出来ることになる。パレへの感謝をこめて、記念の品をラヴァルに贈る計画もねっている。

わが国のパレ四〇〇年祭記念会は会長に東大第一外科の森岡恭彦教授、そして事務局は同第一外科医局。実行委員長は小生が勤めている。理解ある会員の皆様の御協力・御参加をお願いする。

（慶應義塾大学医史学）

例会記録

六月例会　平成二年六月二十三日（土）

順天堂大学医学部九号館一番教室

一　レメリンの解剖書（和蘭内外分合図の原本）の新知見　酒井　シヅ

二　幕末・明治初期の電気治療　中村　昭

九月例会　平成二年九月二十二日（土）

順天堂大学有山記念講堂

（九月例会はポンペ顕彰記念医学講演会に振り替えた）

ポンペ顕彰記念医学講演会

主催　ポンペ顕彰記念会・（財）循環器病研究振興財団

講　演　ポンペと長崎　羽田　春兔（日本医師会会長）

鼎　談　患者と医師の信頼関係　阿部　正和（東京慈恵会医科大学学長）

村上陽一郎（東京大学先端科学技術研究センター教授）

吉田　忠（東北大学文学部教授）

特別講演　重層的な医療　遠藤　周作（作家）

十月例会　平成二年十月七日（日）

順天堂大学有山記念講堂

（十月例会は富士川游先生没後五十年記念会に振り替えた）

富士川游先生没後五十年記念会

一　郷土・広島にみられる富士川游の世界　江川　義雄

二　富士川游・呉秀三両先生の間　岡田　靖雄

三　富士川游と土肥慶蔵　長門谷洋治